

陸前高田市の津波被害調査における『岩頭の女』との出会い

2012年9月末に災害調査のために陸前高田市を訪問した。市の中心部は、幾つかの鉄筋コンクリートの建物を残すのみで、ほかは全て津波にさらわれて跡形もなかった。市役所や消防署の建物とは別に、中央公民館と体育文化センターの複合施設があって、その前庭には片付けられた車両などの瓦礫が集積されていた。その瓦礫の山と被災建物の間には大きな岩が放置されたままになっていた。よく見ると岩塊の側面には『岩頭の女』と書かれたプレートが逆さまになっていた。この巨石は、津波の力によって裏返しにされたと云うことであろう。『岩頭の女』とのまったく偶然の出会いであった。

帰宅してからネット検索してみると、『岩頭の女』が陸前高田市に設置された経緯や、その当時(震災前)の写真がすぐさま入手できた。まったく便利な時代になったものと感じ入った次第である。そのネット情報によれば、『岩頭の女(がんとうのひと)』は彫刻家柳原義達氏の作品で、1978年3月12日に塩釜市在住の白井かつ氏によって、陸前高田市の文化施設の竣工を記念して寄贈されたことが分かった。

さらに、つい最近になってもう一度ネットで『岩頭の女』を検索してみると、津波に流された『岩頭の女』のブロンズ像が修復されて、盛岡市の岩手県立美術館に収蔵され常設展示されていることが分かった。以下に関連の資料を転載させていただく。



帰る日を待つ

岩手県立美術館 vol.34 2013.04

館長 原田 光

《岩頭の女》という。ブロンズでできていて、高さは 2.4 メートル。30 トンをこえる自然石を台座にして、丈高く立っていた。それだからだろう、《岩頭の女》なのだった。陸前高田市の博物館前に置かれていて、大津波にのみこまれた。巨岩の台座さえ、20 メートルも流れてひっくり返った。彫刻はもげて台座を離れ、失ってしまった。1ヶ月半もたってから、自衛隊がガレキの中にこれを見つけた。川をまたいだ向こう側まで運ばれていってしまっていたということである。両足首から下が無い。片手もない。昨年晩秋、山形の修復工房・明舎というところへ搬送した。真水につけ、何回も水をかえて、塩分や砂を取りのぞいた。錆をとった。劣化したところは手当した。修理保存だが、なくなった部分を補うようなことはやらない。現状をあるがままに残す。そうして、しかし、仮の台座の上に、ふたたび立ちあがらせてくれたのだった。美術館では、「救出された絵画たち 陸前高田市立博物館コレクション展」(2月2日-4月14日)を開いていたが、間にあって最後の10日ばかり、これは展示室の一隅に立った。さり気なくて美しかった。静かな面立ちをして遠くへ目をやっていた。それなのに、しかし、見ていると目頭が熱くなってくる。



柳原義達《岩頭の女》

この彫刻についての 3.11 を知っているからか。満身創痍で、さらけだすものはみなさらけだしたような格好になってしまったのに、どうして頭部だけ無傷で残って、なんでもなかったような顔をしているのか。よく耐えて生きていてくれたと思ったら、彫刻でなくて、その人本人と向きあっている気がした。

これは彫刻家の柳原義達の作品である。柳原さんはもういないが、かりに今のこの彫刻の姿を見たとしたら、どう思われたか。衝撃をうけて、深く悲しまれたにちがいない。しかし、同じくらいに深く、感動したのではなかったろうか。欠けても、変形しても、あり場所を失っても、そのまま、さり気なくここにあり、そのために、いっそう何か存在感を引きだせることもある彫刻というものの不思議さ、強さとしなやかさと、それだからこそ、優しさといったものに。また、うなずかれたのではなかったろうか。作者の手を離れて、彫刻は育つてゆくと。いつの日か、これは陸前高田に帰ってゆく。早くそうなってほしい。3.11 を体験し、救いだされ、これから先をあらたに生きる、そういうことをみな刻み、今ある身体のまま、陸前高田の街中に立つ、そうであってくれたら嬉しいがと僕は思うのである。彫刻は育つなどと書いたけれども、ただ育つわけではない。町の人々のこれを見る思いの深さの分だけ育つ。早く帰ってゆかねばならない。待っている人たちがいるから。

『そのブロンズ像には左腕がない…』

毎日新聞“余録” 2017/3/12

そのブロンズ像には左腕がない。両足首から下も失った。岩手県陸前高田市にある体育文化センターの中庭に置かれていた「岩頭(がんとう)の女(ひと)」だ。柳原義達(やなぎはらよし たつ)作、高さ2・4メートル。巨岩を台座にして立っていた。6年前の大津波で台座ごと流された▲自衛隊員ががれきの中から見つけた。山形の文化財修復会社で何度も真水につけて塩分や砂を取り除いた。市内では博物館、図書館など四つの文化関連施設が水没し、多数の資料や文化財が流された▲学芸員の熊谷賢(くまがいまさる)さんは救援物資の仕分けや配分に追われるうち、博物館の職員6人が犠牲になったことを知る。学芸員で助かったのは自分一人。貴重な文化財を守らなければならない。そう決心し、博物館の勤務経験がある人や県内の関係機関に応援を求めた。がれきや土砂の中から捜し出すレスキュー活動を始めたのは3月末のころだった▲市内では遺体が見つからない人も多い。被災者から「そんなものより人を捜せ」「捨ててしまえ」と非難されたこともある。一方、家が流されて全てを失ってしまった人がレスキューの現場を訪れてこう言ったという。「ここに来れば陸前高田のものが残っていると思って」▲地域の文化財とは何か。熊谷さんは「被災者が家のあった場所で自分の生きた証しを一生懸命に捜し出していたように、博物館の資料や文化財は陸前高田が陸前高田である証しでもある」と言う。復興にはその証しが欠かせない▲「岩頭の女」の像は今、盛岡市の県立美術館に保管されている。傷ついた体で前を見すえる姿に胸が熱くなる。いつか必ず陸前高田に帰り、すっと立ち上がる日が来る。

